通り浦遺跡・剣塚遺跡

付　筑紫野市大字二日市・大字紫出土の骨蔵器

筑紫野市文化財調査報告書

第 10 集

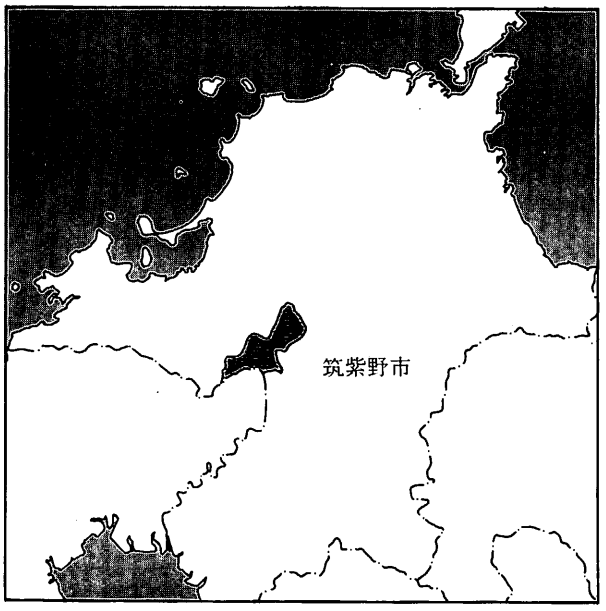
1984

筑紫野市教育委員会

通り浦遺跡・剣塚遺跡

とおうら　けんづか

付　筑紫野市大字二日市・大字紫出土の骨蔵器



序

筑紫野市は昭和47年市制施行以来、早12年目を迎えました。人口も６万人を超え、福岡市のベッドタウンとして急速に都市化が進んでいます。これに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も増加していますが、小規模な開発行為に伴う埋蔵文化財保護は、その発見から協議にいたるまで困難なことが多く、緊急調査実施においても費用・期間など不備な体制で臨まなければならないことも少なくありません。通り浦遺跡・剣塚遺跡ともにこのような状況下での調査であり、報告書刊行が今日まで延びてしまいました。この調査に携わって下さいました方々や市民のみなさんにお詫びするとともに、今後文化財に対する行政の体制も徐々に整えていく所存でございます。

昭和59年９月１日

筑紫野市教育委員会
教育長　松田　康男

本　文　目　次

頁

通り浦遺跡……1
　Ⅰ　調査の経過……2
　Ⅱ　位置と環境……2
　Ⅲ　調査の内容……3
　Ⅳ　まとめ……6
剣塚遺跡……7
　Ⅰ　調査の経過……8
　Ⅱ　位置と環境……8
　Ⅲ　調査の内容……9
　Ⅵ　まとめ……14
筑紫野市大字二日市・大字紫出土骨蔵器……15
　Ⅰ　位置と環境……16
　Ⅱ　筑紫野市大字二日市出土の骨蔵器……17
　Ⅲ　筑紫野市大字紫出土の骨蔵器……19

図　版　目　次

本文対照頁

図版１－１　通り浦遺跡竪穴式住居跡……3
　　２　〃　掘立建物……3
図版２　〃　出土遺物……3
図版３－１　剣塚遺跡調査区遠景……8
　　２　〃　調査区近景……8
　　３　〃　剣塚２号窯跡（前庭部より）……9
　　４　〃　剣塚２号窯跡（焚き口・燃焼部周辺）……9
図版４－１　〃　剣塚２号窯跡（煙道側より）……11
　　２　〃　剣塚２号窯跡（側庭部）……11
　　３　〃　剣塚２号窯跡（側庭部断面）……11
図版５　〃　出土遺物……12
図版６　筑紫野市大字二日市出土骨蔵器……17
図版７　筑紫野市大字紫出土骨蔵器……19

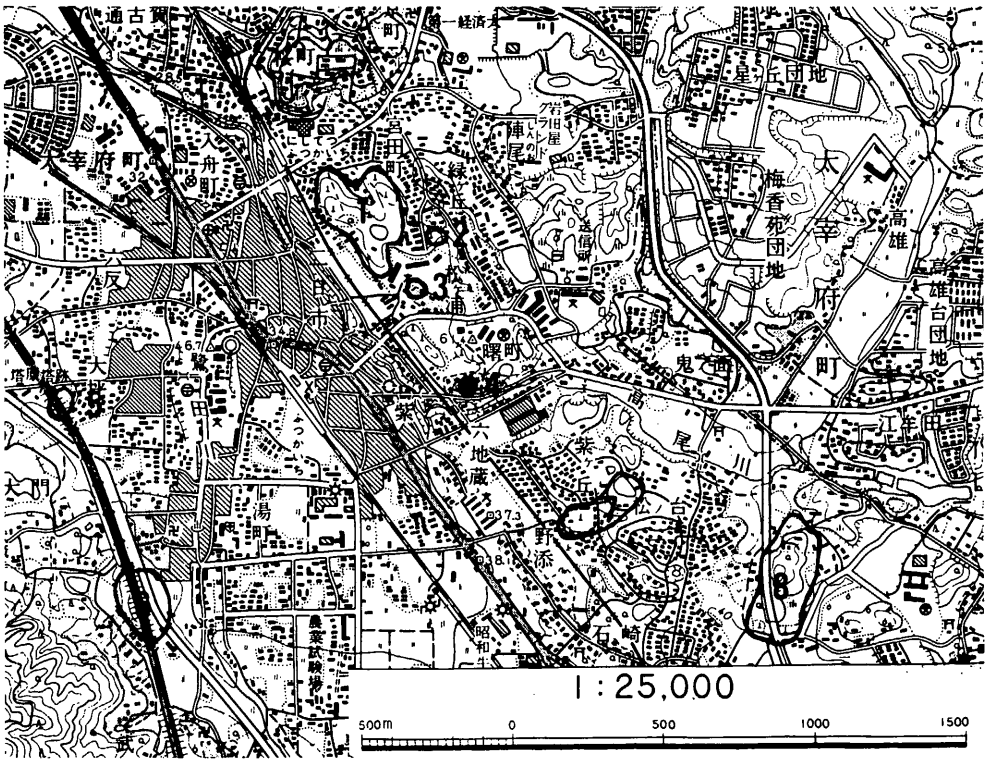
図版 8　　福岡県筑紫野市峰出土の火葬骨（一部）……26

挿　図　目　次

頁

第 1 図　通り浦遺跡周辺弥生時代遺跡位置図……1
第 2 図　〃　住居跡実測図（1/50）……3
第 3 図　〃　住居跡出土遺物実測図（1/4）……4
第 4 図　〃　甕棺実測図（1/8）……5
第 5 図　〃　出土紡錘車・石器実測図（1/2）……6
第 6 図　剣塚遺跡周辺遺跡位置図（1/25,000）……7
第 7 図　〃　周辺地形図（1/400）……9
第 8 図　剣塚第 2 号窯実測図（1/60）……10
第 9 図　剣塚遺跡木棺墓実測図（1/20）……11
第10図　〃　出土土器実測図（1/3）……13
第11図　骨蔵器出土地周辺遺跡位置図（1/25,000）……15
第12図　大字二日市出土骨蔵器実測図（1/2）……18
第13図　骨蔵器出土状況略図……19
第14図　大字紫出土骨蔵器実測図（1/4）……20
第15図　車輪文拓影・復原図（1/2）……21
第16図　大宰府周辺出土骨蔵器（1/3）……22

通り浦遺跡



第1図　通り浦遺跡周辺弥生時代遺跡位置図

1.峰畑遺跡　2.修理田遺跡　3.二日市中学校校庭遺跡
4.通り浦遺跡　5.桶田山遺跡　6.道場山遺跡
7.カケ塚遺跡　8.野黒坂遺跡

例　　言

1．この報告書は、筑紫野市教育委員会が昭和48年度に実施した「通り浦遺跡」の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査、および整理・報告は筑紫野市教育委員会が行なった。

3．本書の執筆・編集は奥村俊久が担当した。

Ⅰ　調査の経過

本遺跡の発掘調査に至る経緯は、私有地の土取り作業中に埋蔵文化財が発見された主旨の通報が市民から筑紫野市教育委員会に寄せられた。当教育委員会では、土地所有者および土取り作業主と協議を行なった結果、ただちに発掘調査を実施することとなった。発掘調査を実施するに当たり、当教育委員会の文化財担当者が出張中であり、筑紫野市歴史研究会に所属しておられた佐藤保雄氏に調査をお願いし、昭和48年7月21日から7月31日まで実施した。

総括（調査責任者）	筑紫野市教育委員会	教育長	西　勉
庶務	同	社会教育課課長	武藤　久雄
		社会教育係係長	笠　武人
		同　主事	山野　洋一
発掘調査	筑紫野市歴史研究会		佐藤　保雄

また発掘調査に際して、東福岡高等学校史学部、青柳栄一氏より多大な御援助、御協力をいただきました。ここに記して感謝する次第であります。

Ⅱ　位置と環境（第1図）

通り浦遺跡は福岡県筑紫野市大字紫に所在し、463番地の28・29・30を調査した。

筑紫野市のほぼ中央には宝満山より派出した山陵が延び、山陵は大きく開析されていくつかの丘陵を形作っている。この丘陵上には多くの遺跡が点在するが、なかでも西側の丘陵は、峰遺跡、峰畑遺跡、修理田遺跡、二日市中学校校庭遺跡、五穀神山古墳、カケ塚古墳、カケ塚遺跡、針摺（下石仏）遺跡など特に多い丘陵である。この丘陵はその中ほどで南北に二分できるが、通り浦遺跡はその北側丘陵の南端西側、標高約45ｍに位置する。

Ⅲ　調査の内容

1　調査概要

発掘調査は工事と平行して行なわれたが、細部において業者との調整がつかず、遺物の取り上げしかできないものもあり、甚だ不十分な調査であった。遺構は竪穴式住居跡１軒、甕棺墓３基、土壙墓１基、掘立建物１棟である。甕棺墓は遺構全体のなかで南側にあり、調査開始前後に重機による破壊を受けた。

2　遺構と遺物

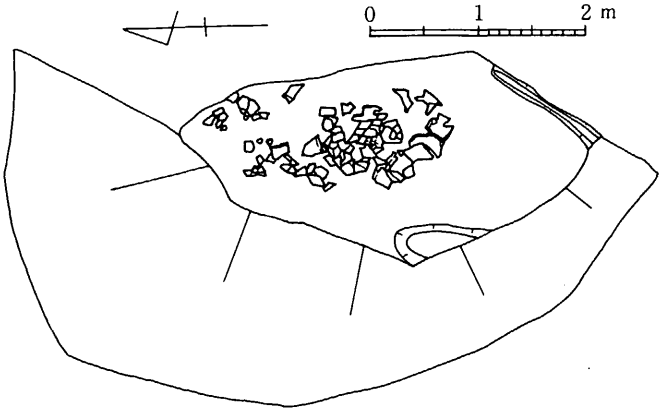
竪穴式住居跡（第２図　図版１－１）

調査区の東側から検出した。すでに大部分が削りとられていたが、南側に残された幅20cm足らずの溝が壁面下に掘られたものであるならば、プランは方形である可能性が極めて高い。床面から僅かに浮いたレベルに土器が多量に検出され、住居跡が使用されなくなって間もなく、廃棄されたものと思われる。

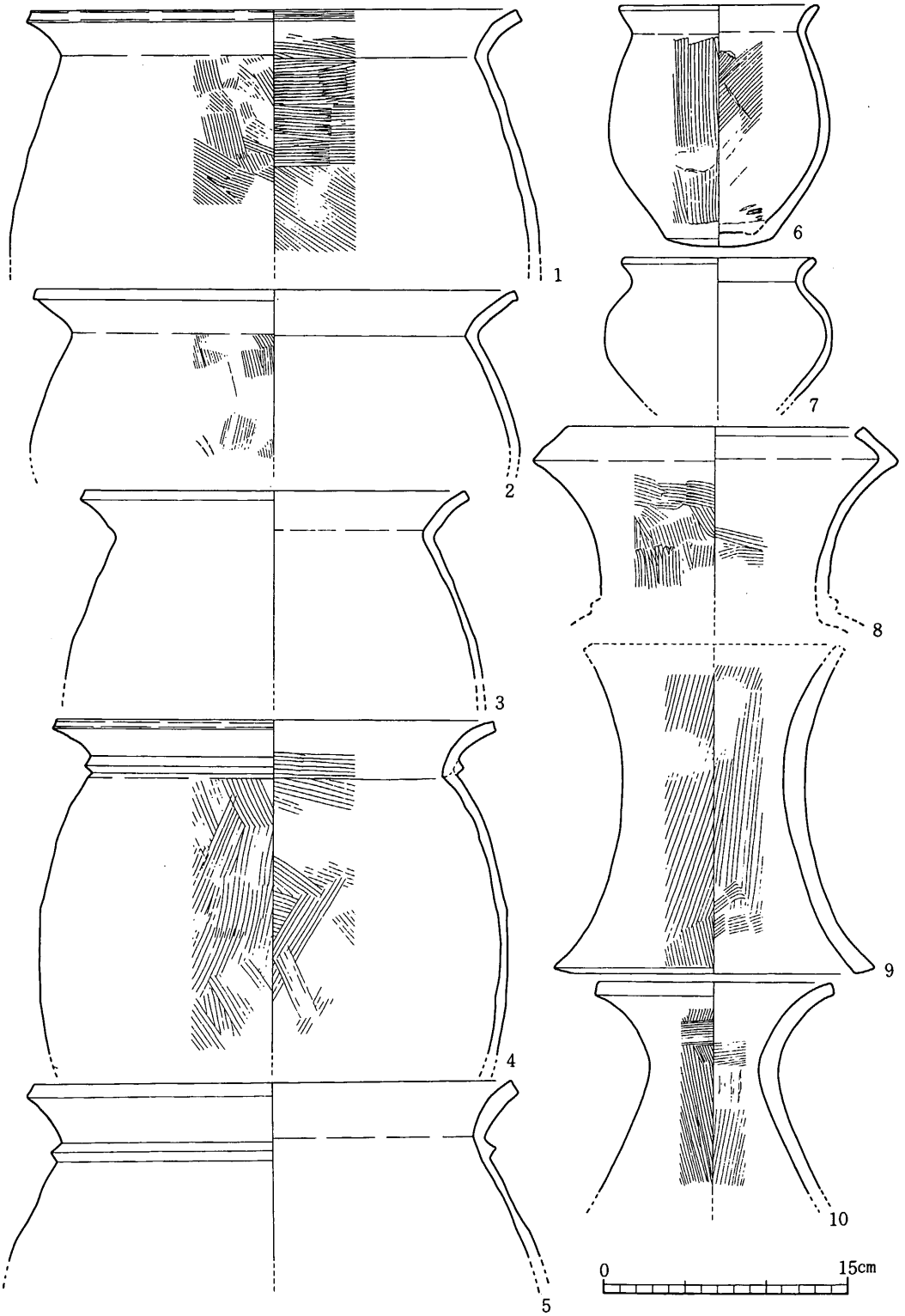
遺物（第３図　図版２）

遺物は大半が小片で、完形に復原できるものは少ない。

１～５は中形の甕で、口径24cm～30.4cmを測り、４・５には頸部に１条の三角凸帯が貼付される。口頸部は外反する「く」の字口縁で、胴部はゆるやかなふくらみをもつ。器面は内外面とも刷毛で整えられる。６・７は小形の壺である。６は口径12.4cm、器高15cmを測る。口縁部はあまく外反し、胴部はやや張る。底部はレンズ状を呈す。器面は内外面ともに刷毛目が残り、口縁部・底部はナデで仕上げられる。７は口径12cmを測る。口縁部は短いが強く外反し、胴部の張りも強い。調整は器面の剝落・磨滅が著しいため不明瞭であるが、胴部内面下半に縦方向



第２図　住居跡実測図（縮尺1/50）



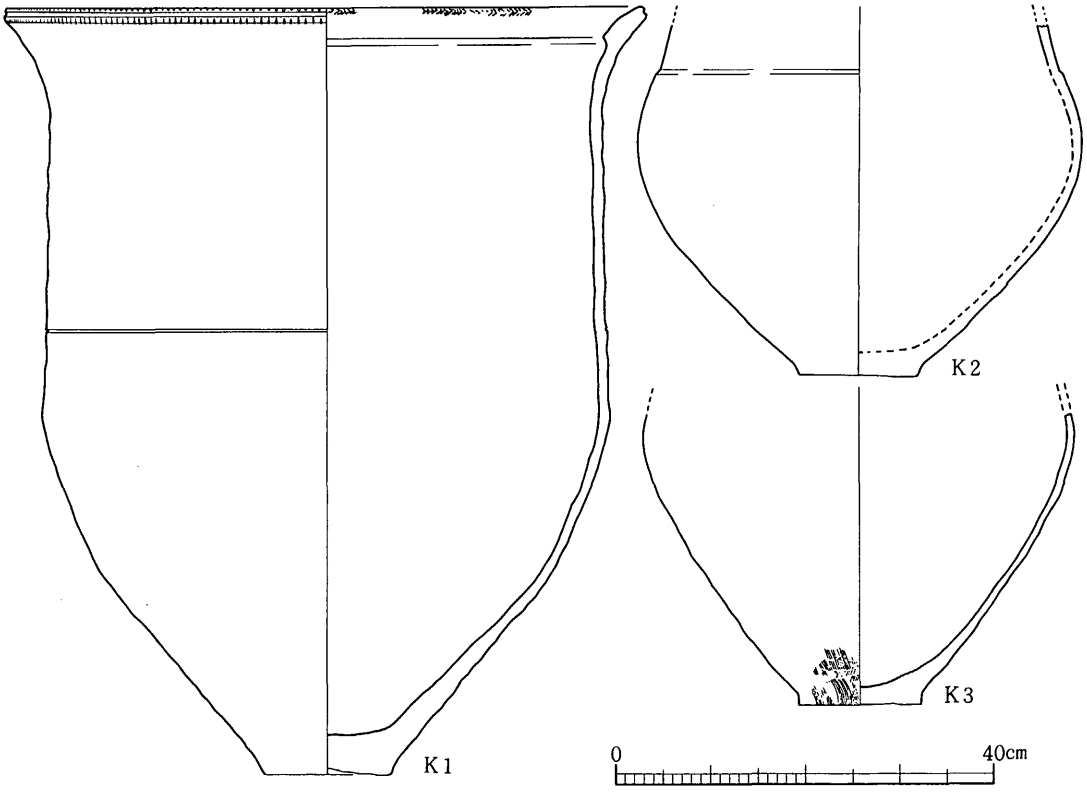
第３図　住居跡出土土器実測図（１/４）

の刷毛目が僅かに認められる。８は二重口縁壺の口縁部で、口径18cmを測る。口縁反転部は「く」字状をなし、口縁立上りは直線的に内傾する。調整は頸部内外面に刷毛目が認められる。９・10は器台である。９は受部を欠失する。脚裾径19.6cmを測り、くびれ部は器高のほぼ中央にある。10は脚部を欠失する。受部径14.6cmを測る。くびれ部は上位にあり、受部は大きく外反する。９・10とも器面は刷毛目で整えられる。

甕棺（第４図　図版４）

Ｋ１は土取り中に崖面から転落したものである。口径68cm、器高81.2cmを測る。口縁部は外反し、口縁内側には粘土帯を貼付する。口唇部は凹状をなし、上下両端に刻目が施させる。口縁端部内面には羽状文を施す。羽状文は磨滅して明瞭でないが、２・30を単位として、間隔をあけて配される。頸部はほとんど締まらず、胴部との境に幅１～２mmの浅い沈線が１条巡る。胴部は沈線下15～20cm程度の部位からくびれ、やや上げ底となる底部へ至る。色調は淡黄褐色を呈し、外面には化粧粘土がよく残る。調整は口縁部にヨコナデが施され、以下ヘラ磨きされる。

Ｋ２は頸部から上を欠失する。頸部と胴部の境に段をつくり、胴部は球状に近く張る。色調は淡茶褐色を呈し、調整は段付近がヨコナデ、以下ヘラ磨きされる。Ｋ３も胴部上位から上を

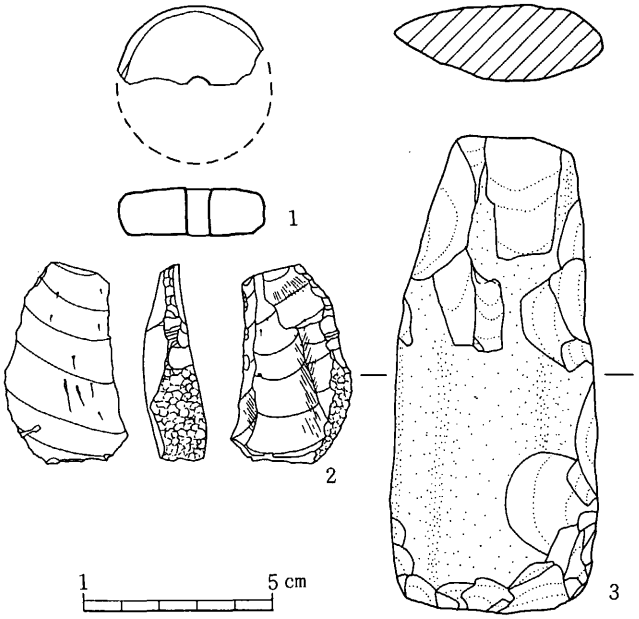


第４図　通り浦遺跡甕棺実測図（１/８）

欠失する。K２と同じような締まる頸部と強く張る胴部をつくるタイプと考えられるが、胴部の張りはK２ほどではない。色調は黄褐色を呈し、外面調整はヘラ磨きされる。K２・３とも工事中に出土したものである。

その他の遺物（第５図）

いずれも表採の遺物である。１は土製紡錘車で、½余りを欠失する。径４㎝程度と推測され厚みは中心部で1.2㎝を測る。２はナイフ形石器で、刃部長4.1㎝、最大幅2.9㎝、最大厚1.4㎝を測る。気泡を含む黒耀石の縦長剝片を用い、刃部には使用痕が認められる。背部中ほどまでブランティングが施され、あとは自然面を残す。３は玄武岩製石斧で、全長12.6㎝、最大幅5.5㎝、最大厚２㎝を測る。



第５図　通り浦遺跡出土紡錘車・石器実測図（１/２）

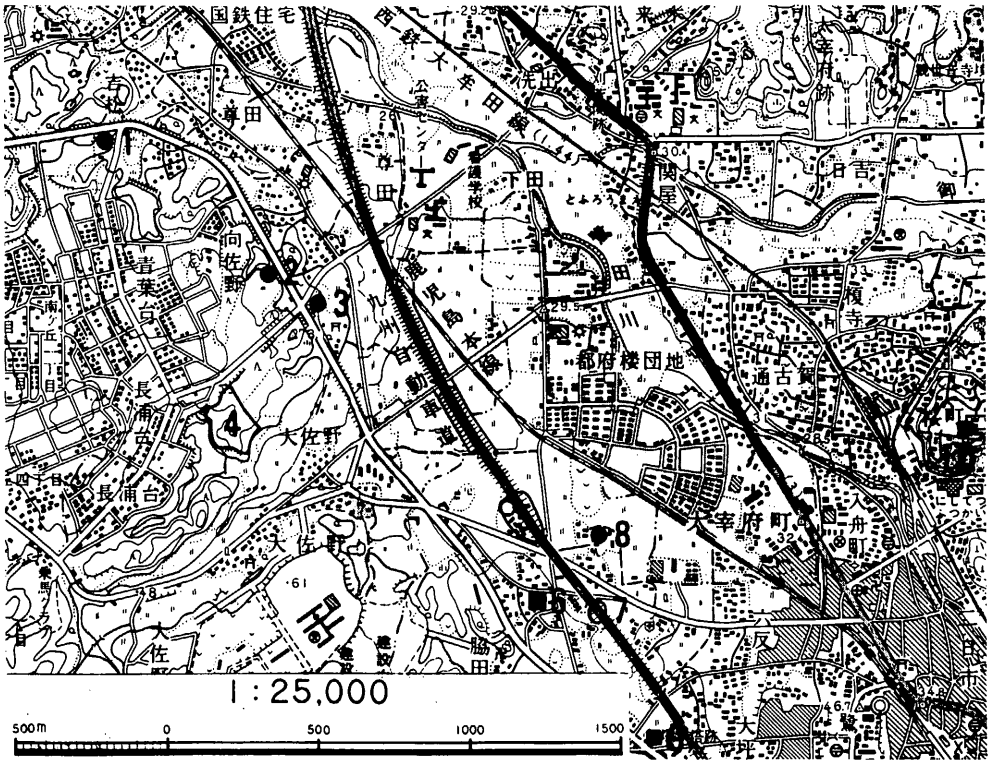
Ⅳ　まとめ

住居跡は大破しているため詳細は不明であるが方形プランの竪穴式住居跡であったと思われる。次に出土遺物をみてみると　甕は口頸部が「く」字状を呈し、口縁部はやや外彎し、胴部は長胴となると思われる。他の遺物も古い様相を示すものもあるが、弥生時代後期中頃のものと考えられる。

甕棺は壺が大形化したもので、壺の形態をまだ強く残す。この形態の甕棺は狭長な平野を挟み対面する剣塚遺跡(註１)からも出土している。弥生時代前期中葉～後葉の甕棺である。

註１　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅣ下巻　福岡県教育委員会　1978

剣塚遺跡



第6図　剣塚遺跡周辺遺跡位置図

1.神ノ前窯跡　2.長浦窯跡　3.向佐野窯跡　4.宮ノ本遺跡
5.剣塚遺跡(○当該報告地点)　6.杉塚廃寺　7.唐人塚遺跡
8.埴安神社古墳　9.塔原廃寺　10.般若寺跡

例　　言

1．この報告書は、筑紫野市教育委員会が昭和54年度に実施した剣塚遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理・報告は筑紫野市教育委員会が実施した。

3．本書に掲載した図は山村淳彦、奥村俊久が実測した

4．本書の執筆、編集は奥村が担当した。

Ⅰ　調査の経過

昭和55年、市民から周知の遺跡である剣塚遺跡の西側部分が宅地造成されているとの通報が筑紫野市教育委員会に寄せられた。市教育委員会は、造成現場を確認するとともに、開発を行なっている信連建設株式会社と協議を行なった。その結果、同年3月10日から3月26日まで緊急発掘調査を実施することになった。調査組織は下記のとおりである。

総括（調査責任者）	筑紫野市教育委員会	教育長	萩尾　利弘
庶務	筑紫野市教育委員会	社会教育課長	武藤　久雄
	同	社会教育係長	豊福　茂美
	同	社会教育課主事	山野　洋一
	同	同	山村　淳彦
発掘調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課主事	山村　淳彦
		調査補助員	奥村　俊久

また調査中に九州歴史資料館調査課の方々に助言をいただいた、ここに記して感謝する次第である。

Ⅱ　位置と環境（第6図）

剣塚遺跡は福岡県筑紫野市大字杉塚に位置する。

遺跡は筑紫野市西部にある天拝山（標高257,6m）から北へ延びる丘陵の先端に位置し、昭和48～49年に福岡県教育委員会により遺跡中央部が発掘されている。(註1) その調査は7,120m²におよび、弥生時代では住居跡10、袋状竪穴50、土壙墓13、甕棺墓18、石蓋土壙墓2、箱式石棺墓1。古墳時代では古剣塚第1～5号墳、剣塚第1～3号墳、住居跡1。また歴史時代では瓦窯1、溝状遺構1、木棺墓7、土壙墓5、火葬墓2、円形周溝墓2、竪穴式小石室1、といった遺構が検出調査されている。また剣塚遺跡の南側には杉塚廃寺(註2)があり、その東側には唐人塚遺跡(註3)がある。

註1　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅣ」　福岡県教育委員会　1978

註２　「杉塚廃寺」 筑紫野市教育委員会　1979

註３　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X Ⅷ」福岡県教育委員会　1977

Ⅲ　調査の内容

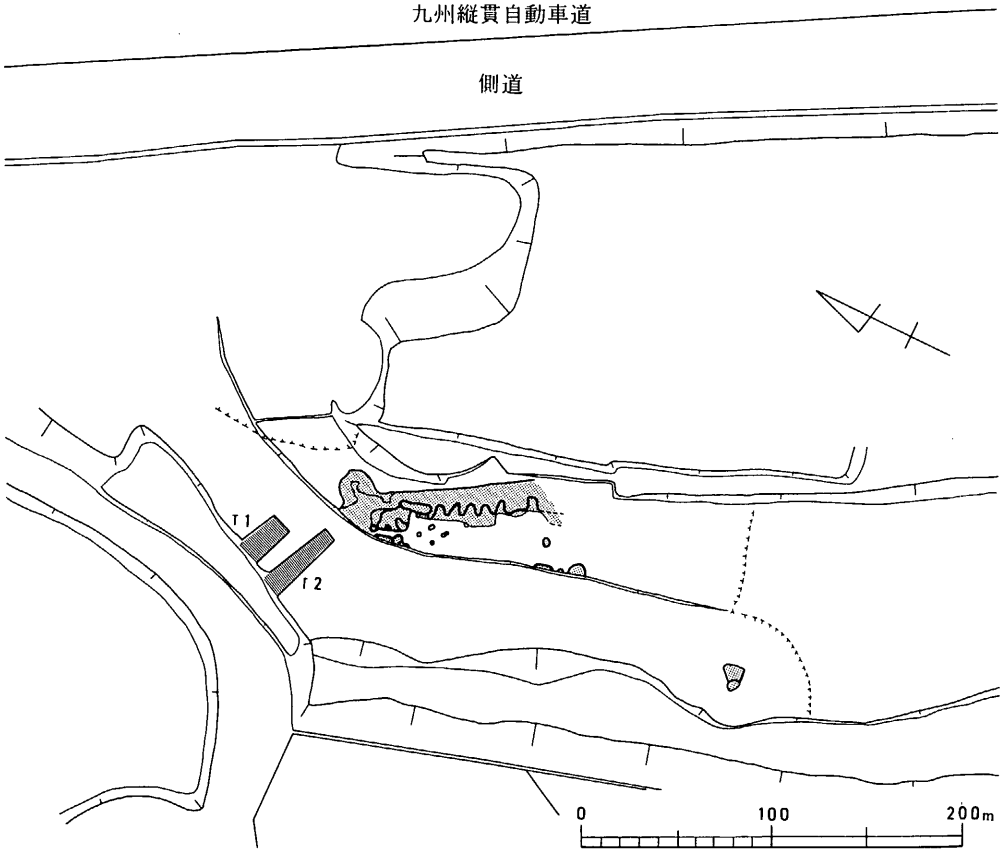
１　調査の概要（第７図　図版３－１・２）

教育委員会の担当者が現場へ赴いたときには、すでにブルドーザーによる粗造成を終えており、遺構の残りは悪く、特に西側はさらに一段下げられていたため南端でピットが２個検出された以外は遺構はみられなかった。

遺構は調査区北東部に窯が１基、木棺墓が１基、およびピットが検出された。窯の焚き口の前方に２本のトレンチをいれたが、すでに造成等で破壊されており、何も検出されなかった。

２　剣塚２号窯跡の調査（第８図　図版３－３・４、４－１～３）

昭和48年度の九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で、10世紀初頭前後に閉窯さ



第７図　剣塚遺跡周辺地形図（１/400）

第8図　剣塚第2号窯実測図（1/60）

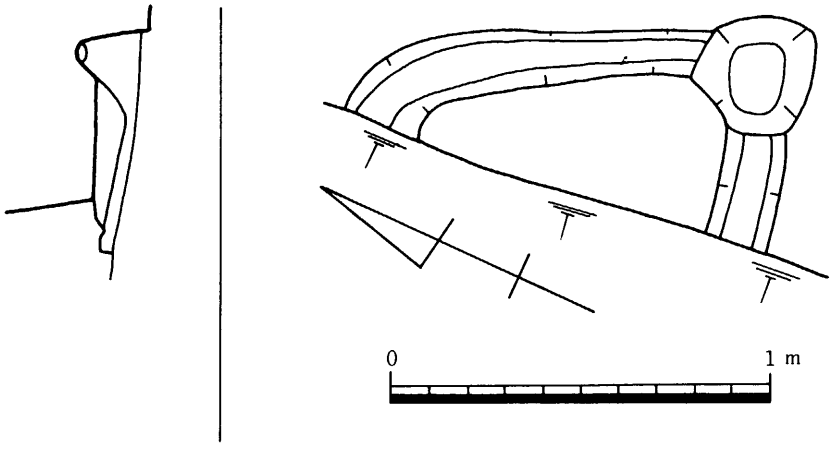
れたと考えられる瓦窯が1基検出されている。報告書では、この瓦窯を「剣塚第1号瓦窯跡」と記されている。(Ⅱ、位置と環境を参照)　本窯は第1号瓦窯と同一遺跡内にあり、距離も40mほど南に位置する。そのため本窯は瓦窯とは考えられないが、混同を避けるため名称を「剣塚2号窯跡」と称する。

窯は調査区の東側隅で検出した。現地はすでに削平されているうえ、周囲は九州縦貫自動車道が通り、宅地化も進んでいるため、旧地形は分かりにくいが、低台地上の北西へ開く小谷のやや奥まった所につくられる。窯は主軸を等高線に対し僅かに斜行する位置をとり、窯の傾斜を緩やかにする努力が払われている。窯体自体もすでに大破しており、窯の上部構造や煙道部は失われている。

前庭部は西側に開き、東側にも若干のスペースをもつ。焚き口は幅60cm程度で、浅い窪みがあり、その中に炭を混えた灰がつまっていた。燃焼部は幅80cmで7°の傾斜をもち、その先は18°の傾斜で焼成部へ至る。燃焼部の中央には火を受け赤変した礫がみられ、その周囲には焼土が残る。焼成部は窯の大半を占め、残存7mを測る。床面の傾斜は前方で9°、奥で5°と非常に浅い。床面・壁面は強い熱を受けているが、補・改修の形跡は認められない。この焼成部の西側に8本の横口が付設される。横口は舟底状を呈し、焼成部床面より40cm程度低い。大きさは均一性を欠くが、いずれも焼成孔に対して直角ないし、やや斜めに取り付けられている。北側から3～6番目までの4個の横口には、直径25cm程度のピットが認められた。横口の西側はさらに10～20cmほど下がり、何らかの遺構があったと思われるが、削平のため明瞭ではない。しかし、残存状況から見る限り、北側は燃焼部脇でやや狭くなり前底部へ続き、南側は南端にとりつけられた横口付近でカーブを描いているため、これ以上は南に延びないと推測される。

3　その他の遺構（図版9）

窯の前庭部脇から木棺墓と思われる遺構を検出したが、上部のピットに切られ、また大半を



第9図　剣塚遺跡木棺墓実測図（1/20）

削平により失っているため明瞭でない。

4　出土遺物（第10図　図版５）

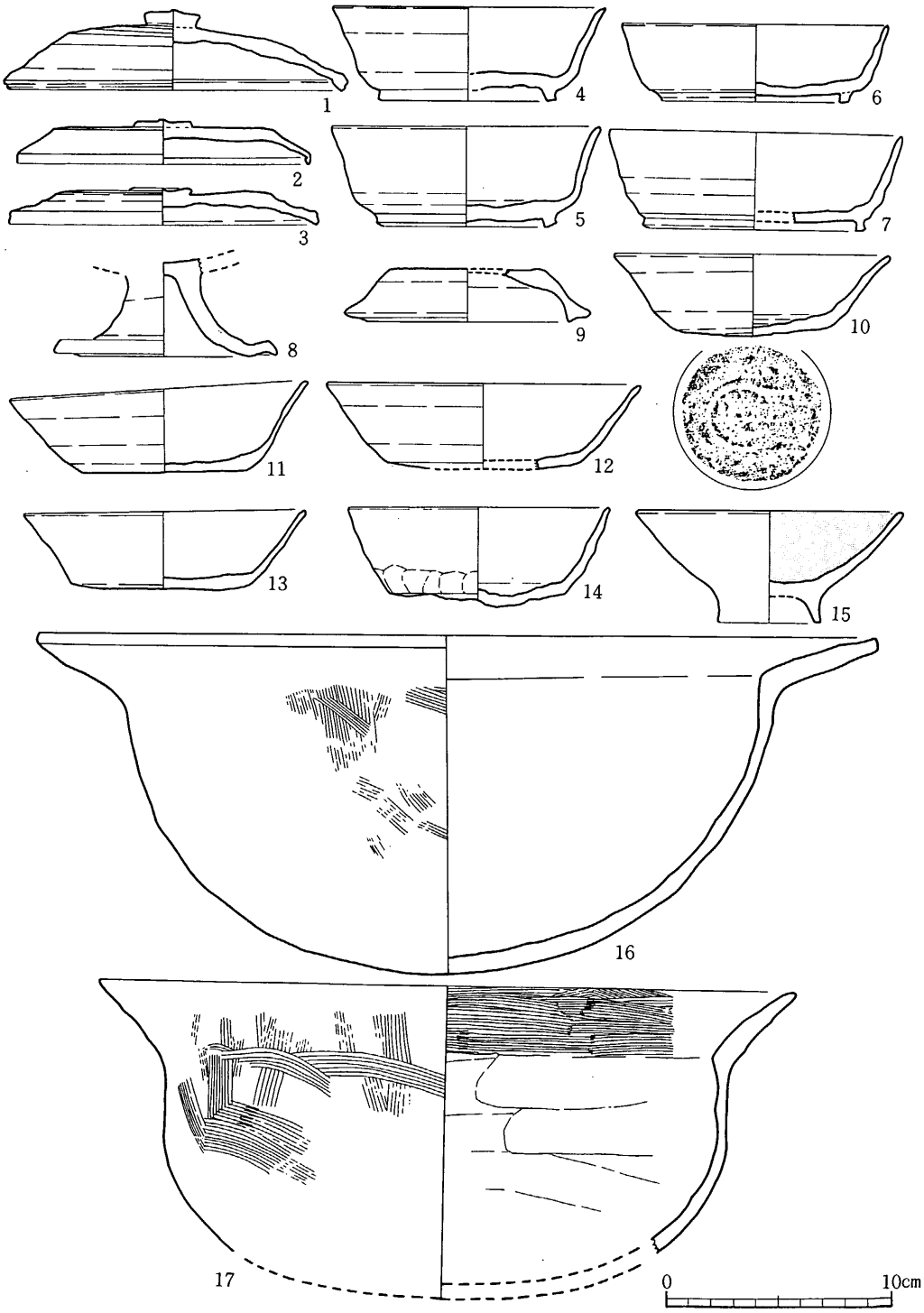
遺物は調査区西側から多く出土した。いずれも比較的浅い位置からの出土であり、遺構に伴うと確定しえない。

１～３は須恵器の坏蓋で、いずれも天井部の中央に扁平なつまみをもつ。１は天井部と体部の境が明瞭でなく、全体にゆるやかなカーブを描いて口縁部に至る。口縁部は断面三角形を呈すように短く下方に引き出される。２は天井部が平坦で、体部は薄く、比較的直線的に作られる。口縁部は折りまげられ、嘴状に引き出される。３は天井部で僅かに窪み、口縁部はやや肥厚する。１～３の調整はいずれも基本的に同じであり、天井部外面は１・２が右廻り、３が左廻りの回転ヘラ削り　体部・口縁部は内外面ともにヨコナデが施され、天井部内面は１のみにナデが観察された。４～７は須恵器の坏身で、いずれも低い高台をもつ。４・５は体部から口縁にかけて、やや外反して開く。高台は八の字形に開き、外端部を僅かに跳ね上げる。６・７は体部から口縁にかけて直線的に開く。高台は７がやや開き気味であるが、６は垂直にとりつけられる。調整はいずれも口縁部・体部内外面から高台の周囲はヨコナデされ、底部内面はナデを施す。

８は須恵器の高坏脚部である。筒部から脚裾にかけて大きく開き、端部は一度もち上げられた後、下方へ引き出される。調整は内外面ともヨコナデが施される。９は土師器の坏蓋である。天井は平坦で板目が残る。体部は丸味をもって下り、端部は外側に引き出される。内面にかえりを有すが、全体に磨滅が著しく明瞭でない。10～14は土師器の坏である。口径は11,6～13,3cm、器高3,4～4,5cm　底径7,1～8,6cmを測る。10～13は体部から口縁にかけてやや外反して開き、10・11の底部には板目が残る。全体に磨滅しているが、口縁部から体部にかけてヨコナデされ、底部内面はナデが施される。底部はいずれもヘラ切りである。14は口縁部から体部にかけて直線的に開き、底部は手持ちのヘラ削りが施されるが、ややいびつな形状を示す。15はウチグロの土器である。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに内湾する。高台は比較的高く、やや開き気味にとりつけられ、体部からゆるやかなカーブで移行する。16・17は土鍋である。16は口縁部が大きく開き、端部は平坦になる。体部から底部にかけて半球状を呈す。内面の口縁部と体部の境目はあまい稜をなす。17は口縁部が16に比べ開きが弱く、体部は張りが強く、

番号	口　径	器高	備　　考	番号	口　径	器　高	底　　径	備　　考
1	15.2	3.5		9	11	2.4		
2	(13)	1.9		10	12.2	3.6	7.1	
3	(13.8)	1.6		11	(13.3)	3.4～4	8.6	
4	(12.2)	4.2		12	14	(3.8)	(3.8)	
5	13	4.5		13	12.1	3.4	8	
6	11.9	3.5		14	(11.6)	4.5	7.8	
7	13	4.3		15	12	5		
	脚裾径	脚高		16	57.4	15.2		
8	9.9	3.5		17	31	(14)		

表１　剣塚遺跡出土土器法量表



第10図　剣塚遺跡出土土器実測図（1/3）

底部へ向ってゆるやかなカーブで移向する。調整はいずれも外面全部と口縁内面に刷毛目が施され、胴部内面はヘラ削りされる。

4 まとめ

剣塚遺跡第2号窯は8個の横口をもち、窯体の傾斜が極めてゆるやかに造られた窯である。県内でも池田遺跡(註1)、丸ヶ谷遺跡(註2)が知られ、全国的にも徐々にではあるが例を増している。今日までの調査研究で炭窯であることが明らかとなり、製鉄遺構との関連が極めて強いことがいわれているが、本窯は大破しており、かつ小範囲の調査であるため、今日までの成果に積極的に寄与するまでに至っていない。この形態の窯は、大沢正己氏の炭窯の分類によりBタイプとされるもの(註3)で、兼康保明氏は木炭の種別をも考慮に入れて大形白炭窯と呼ぶ提言をされている(註4)。この窯は焼成部脇に設けられた8個前後の横口と、横口に続く側庭部を顕著な特徴とする。池田遺跡第1・3号窯(註5)や備中平遺跡(註6)のものは焼成部床面と横口に著しい比高差がなく、側庭部にかけてもその差は僅かである。しかし、本窯や勝央中核工業団地Ⅵ地区(註7)の窯は横口が舟底状に落ちており、構造的に若干の違いが認められる。時期については明確に遺構に伴う遺物が発見されていないので確定しえない。一般にこの形態の窯からは遺物の出土が少なく、時期が不明確であるが、緑山遺跡(註8)では製鉄炉2基とこの形態の窯9基が発見され、7世紀中葉を前後する時期とされている。また岩倉遺跡(註9)では検出状況、遺構の切り合い等から7世紀代～平安時代と比定している。本遺跡より出土した須恵器や土師器の坏は側庭部周辺から出土したものが多く、若干の時期差はあるが、いずれも8世紀代に収まるもので、本窯の時期もこの年代と甚しい差はないと考える。

註1 「池田遺跡」 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1970

註2 「丸ヶ谷遺跡」 『北九州市の埋蔵文化財』 北九州市遺跡分布調査団 1976

註3 大澤正己「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会 1979

註4 兼康保明「古代白炭焼成炭窯の復原」 考古学研究27－4 (108) 1981

註5 註1に同じ

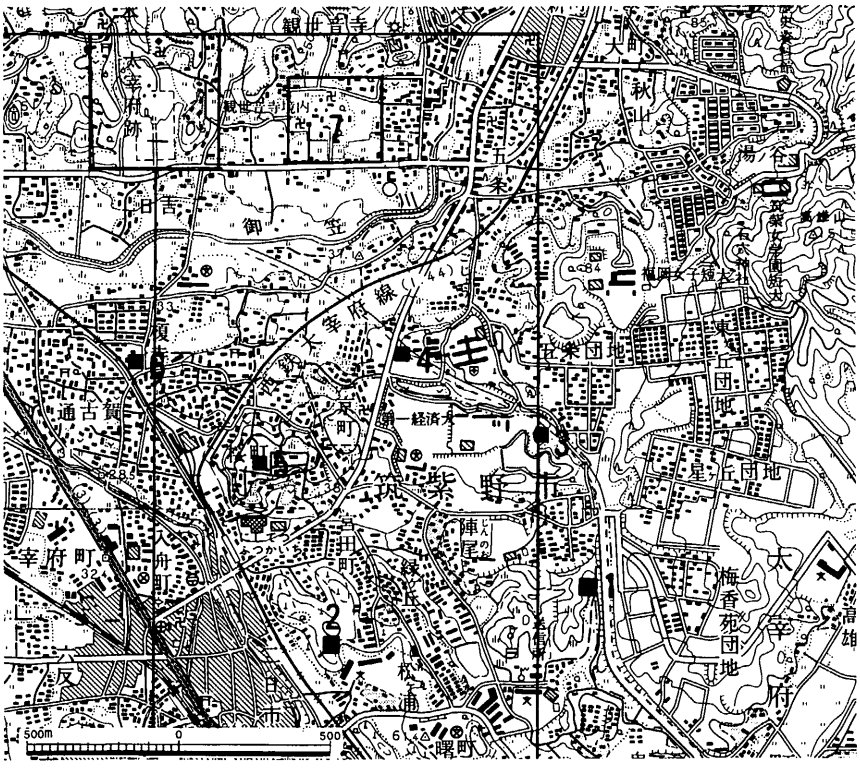
註6 「備中平遺跡」 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査7 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(12) 岡山県教育委員会 1976

註7 勝央中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 勝央町教育委員会(岡山県) 1976

註8 中山俊紀「岡山県津山市緑山遺跡製鉄址の調査」(コロタイプ図版解説) 考古学研究30－4 (120) 1984

註9 「岩倉遺跡・岩倉古墳群」中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査報告8 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(14) 岡山県教育委員会 1977

筑紫野市大字二日市・大字紫
出土の骨蔵器



第11図　骨蔵器周辺遺跡位置図（1/25000）
1.大字二日市骨蔵器出土地　2.大字紫骨蔵器出土地
3.結浦蔵骨器出土地　4.君畑遺跡　5.般若寺跡　6.榎寺　7.観世音寺

例　　言

1．この報告書は筑紫野市大字二日市（字米噛）74番地の4および大字紫（字峰）557番地の3から発見された骨蔵器の報告書である。

2．発見現場へは前者に筑紫野市教育委員会社会教育課主事　山野洋一　奥村俊久、後者は同山野、山村淳彦が赴いた。

3．本書に掲載した図面は前者を山野が、後者を山野・奥村が実測し、奥村が製図した。

4．本書の執筆・編集は奥村が担当した。

Ⅰ　位置と環境（第11図）

筑紫野市は太宰府市の南に位置し、市北部は大宰府の郭内(註1)に収まる。したがって市内には、大宰府に関連する遺跡も多い。近年、この付近は福岡市のベッドタウンとして開発が著しく、開発に先だつ発掘調査も数多い。奈良・平安時代の墳墓関係の発見例をみると、筑紫野市と太宰府市の市境付近に多い。すなわち大宰府条坊の東西際付近で、東西の山稜から延びてくる低丘陵、低台地端部に位置する所である。

条坊の西側には、買地券の出土で注目を集めた宮ノ本遺跡(註2)、九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査された唐人塚遺跡(註3)、桶田山遺跡(註4)、剣塚遺跡(註5)、塔原遺跡(註6)、前田遺跡(註7)、道場山遺跡第2地点(註8)があり、火葬墓（骨蔵器）や木棺墓、土壙墓が検出された。一方、東側に目を移すと福岡南バイパス建設に伴って発掘調査された君畑遺跡(註9)、渡辺正気氏の報告による結浦火葬墓(註10)、第一経済大学構内から出土したと伝えられる白磁皿の蓋付の青磁双耳壺を用いた骨蔵器(註11)などがある。大宰府条坊の周辺部には、まだこのような墓が点在するが、郭の東西に集中しており、今回報告する2例の火葬墓（骨蔵器）も郭の東側に位置する。

註1　鏡山　猛「大宰府都城の研究」 1968

註2　「宮ノ本遺跡」 太宰府町教育委員会　1980

註3　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅧ」福岡県教育委員会　1977

註4　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ」 福岡県教育査員会　1975

註5　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅥ」 福岡県教育委員会　1978

註6　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ」 福岡県教育委員会　1974

註7　註3に同じ

註8　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅩⅤ」 福岡県教育委員会　1978

註9　「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第七集」 福岡県教育委員会　1977

註10　渡辺正気「和同銭副葬の一蔵骨器」 九州考古学１号　1957

註11 「九州の奈良・平安陶磁」 九州歴史資料館　1977

Ⅱ　筑紫野市大字二日市出土の骨蔵器

1　はじめに

昭和55年９月11日、数日にわたる大雨で、筑紫野市大字二日市74番地の４にあるガケが崩れた際に出土したものである。骨蔵器は発見時にはすでにガケ下に落ちており、その周辺やガケの断面からは骨蔵器に伴うと考えられる施設や木炭などはみられなかった。また骨蔵器の中には火葬骨が残っており、鑑定を九州大学医学部教授永井昌文先生（第２解剖学教室）にお願いした。

2　骨蔵器（第12図　図版６）

骨蔵器は須恵器の高台付坏身を蓋とし、いわゆる赤焼きの短頸壺を身とする。

蓋に用いられた坏身は口径14cm、器高4.8cm、高台端部径10.4cmを測る。体部は直線的に開き、口縁端部は丸くおさまる。体部と底部の境はあまく屈曲し、底部は浅いカーブを描く。高台は屈曲部から１cm程度内側に「八の字」状にとりつけられ、端部は外側に引き出される。口縁部から体部にかけては内外面ともヨコナデされ、底部内面はナデが施される。

身に用いられた短頸壺は淡赤褐色を呈し、胴部下部に黒斑を有す。口縁端部を打ち欠き、残存状況で口径11.2cm、器高22.2cm、胴部最大径23.8cmを測る。口縁部はやや外傾して開き、頸部はゆるやかに胴部と口縁部を継ぐ。胴部は肩が張り、肩部から底部にかけてゆるやかな丸味をもって下る。底部は丸底である。調整は内外面とも口縁部から肩部にかけてヨコナデされ、さらに肩部には明瞭さを欠くがカキ目が認められる。肩部から下は外面に横方向平行叩き目が残り、内面には青海波あて具痕が残る。

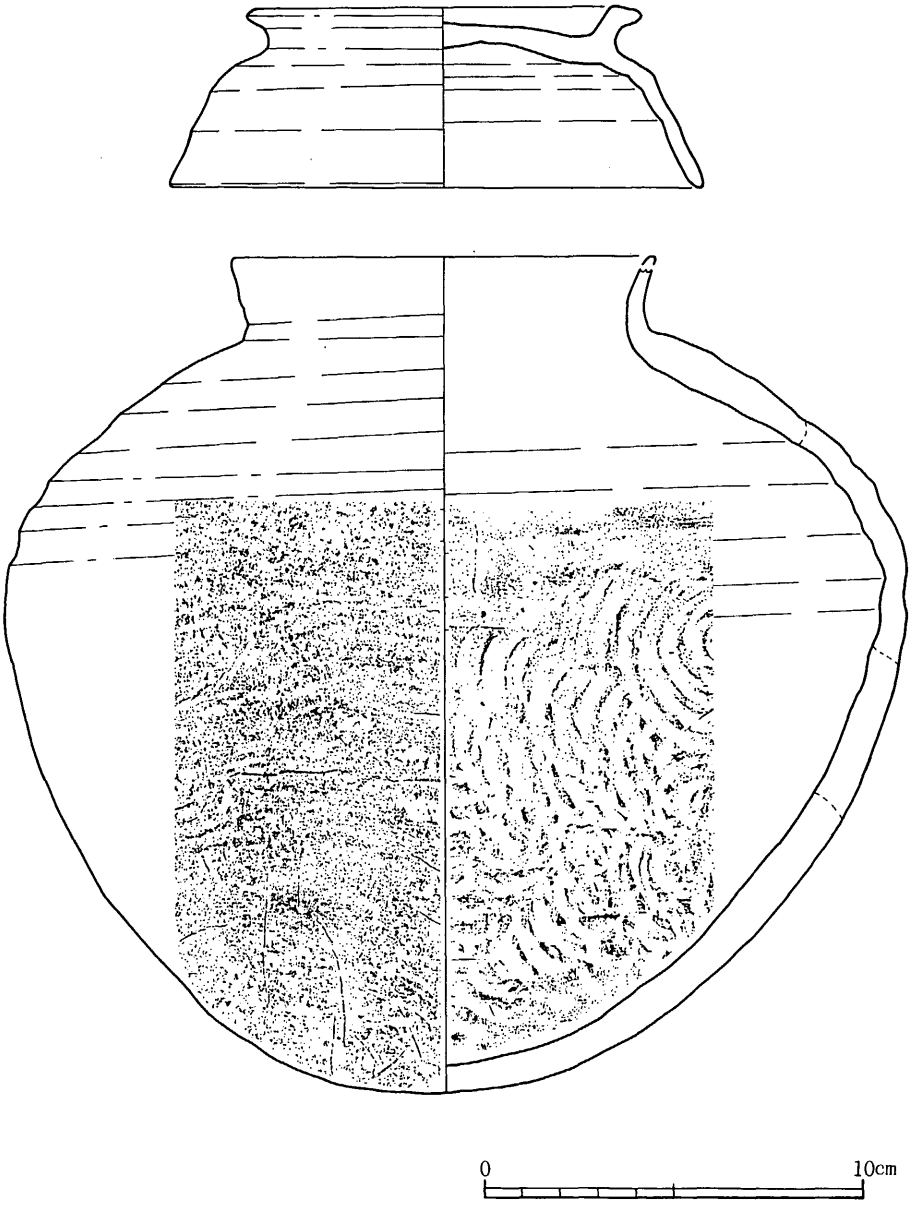
3　骨蔵器内の人骨について

骨蔵器の肩部上位まで火葬骨が入っていた。ほぼ全身から拾われており、火葬のため歪曲、き裂、収縮がある。また銅製品の溶けただれたものが１点収まっていた。人骨の性別、年令については、「左寛骨が残り、大坐痕の開角が広く、著明な前耳状溝があること、および全身骨が火傷による収縮はあるにしても小さいことなどから女性らしい。年齢は右下顎右第３大臼歯が生えていることから成人と思われる。」という永井昌文先生のコメントをいただいた。先生にはお忙しいなか鑑定いただき、ここに記して感謝する次第である。

4　まとめ

本骨蔵器はガケ崩れによる出土で、これに伴う施設などは不明である。

骨蔵器の蓋に用いられた坏身は小田富士雄氏の編年でⅥａとされた形式であり、年代については７世紀中葉から、それよりやや下る時期が考えられるが、この坏は高台にシャープさが失



第12図　大字二日市出土骨蔵器実測図（1/2）

われ、底部がゆるやかな丸みをもっていることから、若干時期は下るものと思われる。身に用いられた短頸壺は胴部外面に横方向の平行叩き目がみられ、この技法は一般に奈良時代後半から平安時代前半にみられるものである。しかし、形態的には古墳時代から類似するものをみることができ、肩部のカキ目調整は、古墳時代のそれによくみられるものである。さらに、いわゆる赤焼き土器は古墳から発見される例が多く、古墳時代の影響も否定しがたい。本来、専用の蓋をもっていたと思われる短頸壺に、坏身を転用しておりやや新しい様相も感じられるが、坏身は磨滅・破損がほとんどなく身との甚だしい時期差はないと思われることなども考慮し、本骨蔵器（火葬墓）は８世紀代に収まるものとしておきたい。

Ⅲ　筑紫野市大字紫出土の骨蔵器

１　はじめに（第13図）

昭和56年３月23日　筑紫野市大字紫557番地の３に在住の和田秀男氏より、自宅の倉庫建築のための基礎工事中　骨のはいった甕が出土したという連絡が市立歴史民俗資料館に寄せられた。

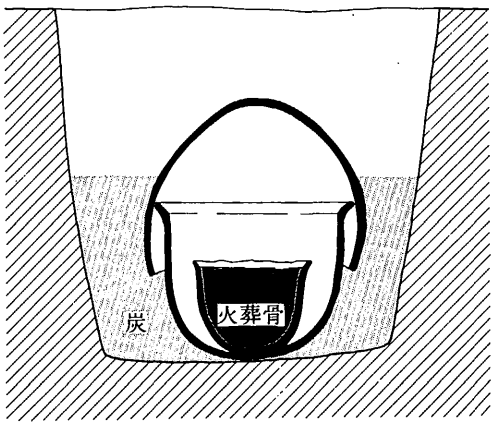
現場では、すでに骨蔵器は掘り上げられており、以後工事に際して担当者が立ち合った。工事区西端で観察した土層は、第１層（約15cm）客土による層、第２層（20cm）客土による層、第３層（約55cm）暗橙色質土層、第４層淡褐色ローム層で　第３層に磨滅した弥生式土器や土師器などの小片がみられたほか、工事に際して遺構・遺物は発見されなかった。

骨蔵器は、工事区東側で第４層に掘り込まれた方形プランの竪穴に埋置され、周囲には木炭が詰められていた。骨蔵器内には火葬骨が残っており、鑑定を長崎大学医学部講師松下孝幸先生（第２解剖学教室）にお願いした。先生にはお忙しいなか、快くお引き受け下さり、ここに記して感謝いたします。

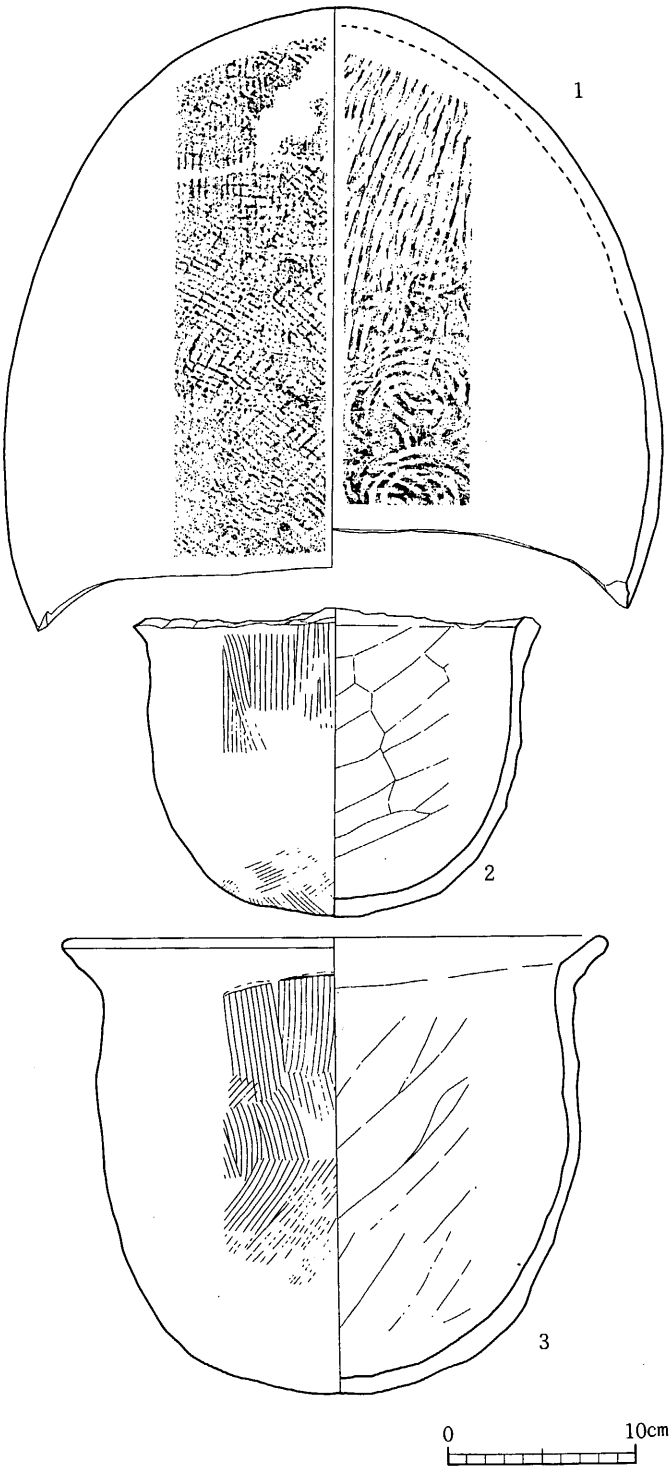
２　骨蔵器（第14図　図版７）

土師器甕の中に、口縁を打ち欠いた小振りの土師器甕を収め、これを内容器とする。更にこの外側には胴部上半を打ち欠いた須恵器の甕を外容器として被せる。

外容器の須恵器甕は、胴部最大径34.7cm残存最大器高33cmを測る。胴部から底部までゆったりとした丸味をもつものである。外面には格子目叩きが施され、内面上半部には車輪文を有する青海波あて具痕、下半部には縦方向の平行状あて具痕を残す。色調は淡青灰



第13図　骨蔵器出土状況略図



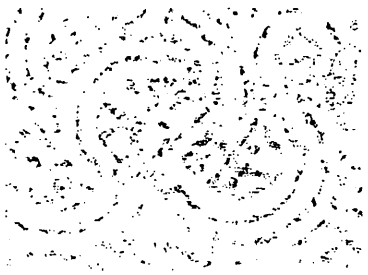
第14図　大字紫出土蔵骨器実測図（1/4）

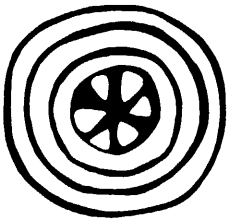
色を呈し、焼きが悪い。中容器の土師器は口径28.8cm、器高24.1cmを測る。口縁部は短く外傾し、端部はまるく収まる。胴部はほとんど張らずに下り、丸底の底部に至る。内面の口縁部と胴部の境はあまい稜をなす。胴部外面は縦方向の刷毛目が施され、胴部内面はヘラ削り上げされる。口縁部から胴部内面上端はヨコナデされる。色調は赤褐色でやや軟質である。内容器の土師器甕は、打ち欠かれた部分で口径21.6cm、器高16.3cmを測る。内面の口縁部と胴部の境は稜をなし、胴部はほとんど張らずに比較的すわりのよい丸底の底部へ至る。外面は胴部から底部に至るまで刷毛目が施され、胴部内面は稜の直下までヘラ削りが行なわれる。色調は暗黄褐色を呈し、硬質である。

3　まとめ（第15図）

須恵器甕は車輪文をもつもので、それを復原すると第15図のように四重の同心円の中央圏内を六等分する放射線をもつものである。車輪文については横山浩一

氏の論考があり(註1)、この中で「時代による車輪文の変遷はまだ詳論できる段階ではない。ただ推測にわたることをおそれずに言うならば、車輪文の変遷は全体として複雑なものから単純なものへという方向をたどったかのようである。(中略) 九世紀の車輪文は種類の変化に乏しく、また、中央圏内に＋・×・＊を収める単純な類が優勢となる。車輪文のなかで最も単純なのは、中央圏内に＋もしくは×を収める類であるが、この類で年代を確認できる例が現在のところ九世紀のものに限られていることは注意されてよい。」と述べられている。また器面調整は大宰府史跡ＳＤ205Ａ出土の甕(註2)やＳＸ1546出土の大甕(註3)に共通のものがみられる。前者と共に出土した土師器の大半は10世紀代に属するものであり、「延長五年」(927) 銘の木簡も出土している。後者に伴出する遺物はほとんどないが、それを覆う層からは奈良時代後半を中心に一部平安時代に降る遺物が出土している。本外容器の調整は後者により近い。中容器の土師器は樋田山遺跡第3号土壙墓出土(註4)のものに類例がみられ、伴出した土師器坏より8世紀末から9世紀初頭の時期が与えられている。





第15図　車輪文拓影・復原図（1/2）

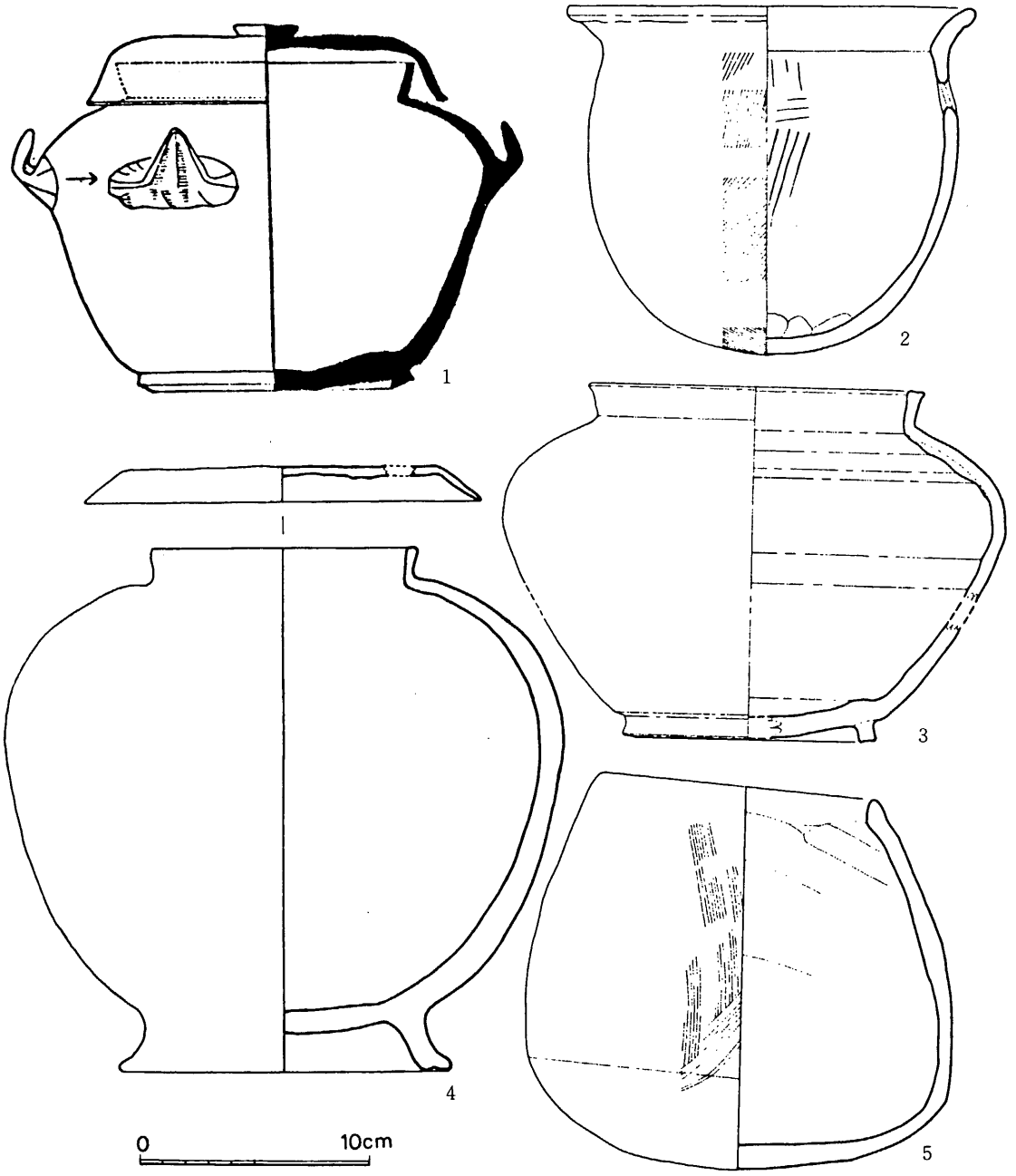
以上のことから本骨蔵器（火葬墓）の年代は9世紀初頭を中心とする前後の時期に収ると考えられる。

註1　横山浩一　「須恵器に見える車輪叩き目文の起源」　九州文化史研究所紀要第26号　1981

註2　九州歴史資料館　「大宰府史跡　昭和56年度発掘調査概報」1982

註3　九州歴史資料館　「大宰府史跡　昭和54年度発掘調査概報」1980

註4　福岡県教育委員会　「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅵ）」1975



第16図　大宰府周辺出土骨蔵器（1/3）
1.結浦出土骨蔵器　2･3.唐人塚6号墳骨蔵器　4.花見ヶ丘出土骨蔵器
5.宮ノ本4号墓骨蔵器(出典は「Ⅰ.位置と環境」を参照)

参　考　文　献

中間研志「大宰府の奥津城」大宰府古文化論叢　下巻　1983

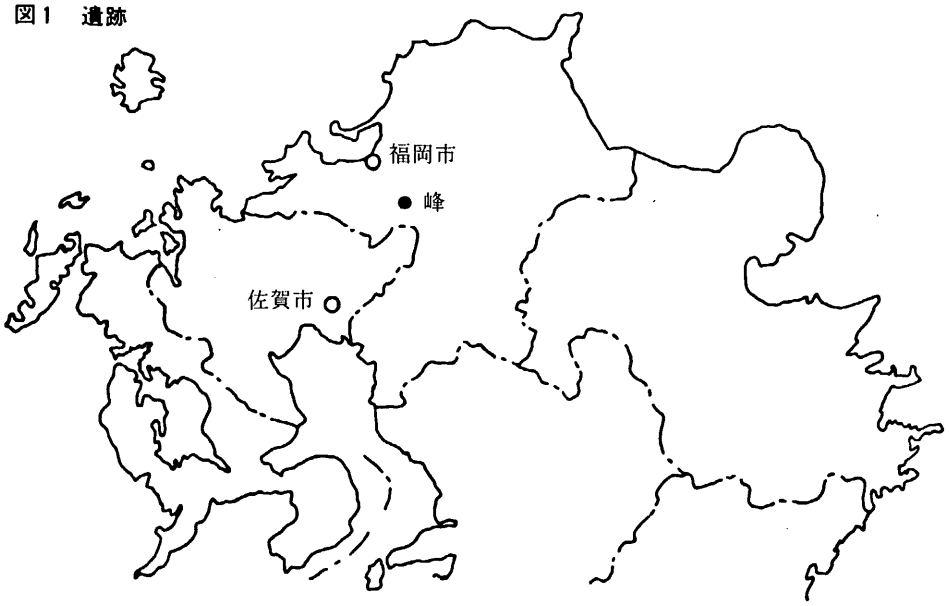
福岡県筑紫野市峰出土の火葬骨

松下　孝幸※

はじめに

福岡県筑紫野市大字紫557－3字峰から1981年に蔵骨器が出土し、この中から人骨が検出された。人骨の残存量は比較的多く、またこの人骨は出土例の少ない平安時代に属するものである。本例は火葬されていたため、その形質の特徴を明らかにすることはできなかったが、性別をある程度推測することができたので、人骨の残存状態とその推定結果を報告しておきたい。

図1　遺跡



資料および所見

残存量は多く、重量にして約1,210ｇあったが、火葬されていたため、人骨は大部分が細片状態である。残存骨には全身の大部分の骨が認められたが、四肢長骨の量が少ない。

この人骨は解剖学的精査の結果、1体分の人骨であり、下記の所見より女性の可能性が強い人骨である。また本例は考古学的所見から、平安時代初頭（9世紀初頭）に属する人骨である。

同定することができた骨は、頭蓋、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、脛骨、膝蓋骨、椎

※　Takayuki Matsusita　長崎大学医学部解剖学第二教室
(Department of Anatony, Faculty of Medicine, Nagasaki University)

骨、肋骨、足根骨、手根骨、中手骨、中足骨および手足の指骨であるが、これ以外に同定できない四肢長骨の骨片が残存していた。

(1) 頭蓋

頭蓋は重量にして約260ｇ残存しており、残存量は多いが、小片になっているため、骨の種類の同定は困難で、右側の側頭骨の乳様突起、下顎骨の右側下顎枝、同じく左側下顎頭および歯槽部を確認できたにすぎない。

また、歯も残存していたが、すべて歯根部のみで、歯種を同定することはできなかった。

(2) 四肢骨

肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、手根骨、中手骨および指骨が残存していた。

１)上肢骨

１．肩甲骨

右側は肩甲棘部が、左側は関節窩部が残存していた。

２．上腕骨

残存量は著しく少なく、左右不明の骨頭を同定できたにすぎない。

３．橈骨

橈骨の残存量も少なく、左右不明の橈骨頭の一部が残存していたにすぎない。

４．尺骨

他の骨に比べると残存状態が良い。右は近位部と骨体中央部が残存しており、左側は近位部と遠位部が残存していた。残存部の諸径は小さい。

５．手根骨

いずれも右側の舟状骨、有頭骨、小菱形骨および豆状骨が残存していた。

３)下肢骨

寛骨、脛骨、膝蓋骨、足根骨、中足骨および指骨が残存していた。

１．寛骨

腸骨の一部が残存していたにすぎない。

２．脛骨

左側の近位端（上関節面）および遠位端が残存していた。諸径は著しく小さい。

骨は火葬すると一般的に収縮し、径が小さくなるといわれているが、これを考慮しても本脛骨の径は著しく小さい。

３．膝蓋骨

左側の大部分が残存していた。計測が可能で、表１に示すとおり、最大厚は14㎜（左）、外切面幅は19㎜（左）で、その径は小さい。

表1　膝蓋骨計測値（女性、mm）

	左
3.最大厚	14
6.外切面幅	19

4．足根骨

左側の距骨および踵骨のそれぞれ一部、舟状骨および内側楔状骨が残存していた。

(3)　躯幹骨

1．椎骨

重量にして約60ｇで、残存量は多くない。椎体はほとんど認められない。環椎（第1頸椎）および軸椎（第2頸椎）を同定することができた。

2．肋骨

重量にして約30ｇで、残存量はきわめて少ない。

(4)　性別・年齢

上述しているように、脛骨および膝蓋骨の径は著しく小さい。火葬すると径が小さくなるといわれているが、これを考慮しても本例は著しく小さいようで、この径が小さいということだけから、性別を推定するとすれば、女性の可能性が強い。年令は推定することができなかった。

総　括

1．福岡県筑紫野市大字紫557－3字峰から1981年に蔵骨器が出土し、その中から1体分の火葬骨が検出された。人骨の残存量は比較的多く、重量にして約1210ｇであった。
2．この人骨は平安時代初頭（9世紀初頭）に属する人骨である。
3．全身の大部分の骨が認められたが、大部分は細片状態であった。
4．本例は、残存していた部分の径が著しく小さいことから推測すれば、女性の可能性が強い。

≪擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、筑紫野市教育委員会社会教育課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。≫

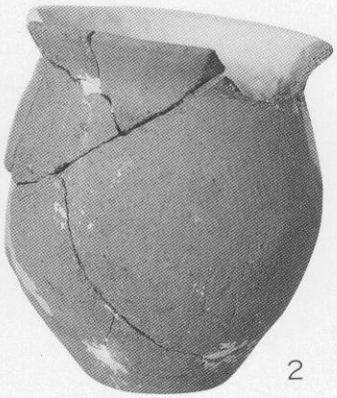
参考文献

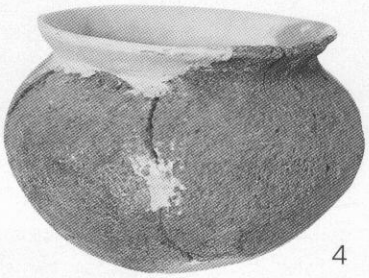
1．松下孝幸、分部哲秋、伊丹陽、野田耕一、1983：山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡（山口県埋蔵文化財調査報告70）：147－148.
2．松下孝幸、分部哲秋、佐熊正史、1983：山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群（山口県埋蔵文化財調査報告73）：32－36.
3．松下孝幸、1984：鹿児島県大隅半島出土の火葬骨。鹿児島考古、第18号：163－169.

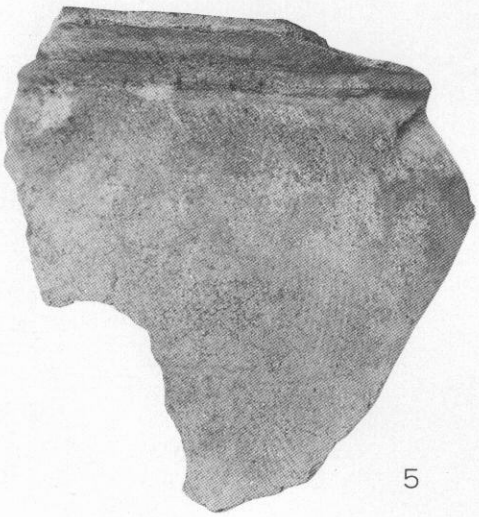
図　　版

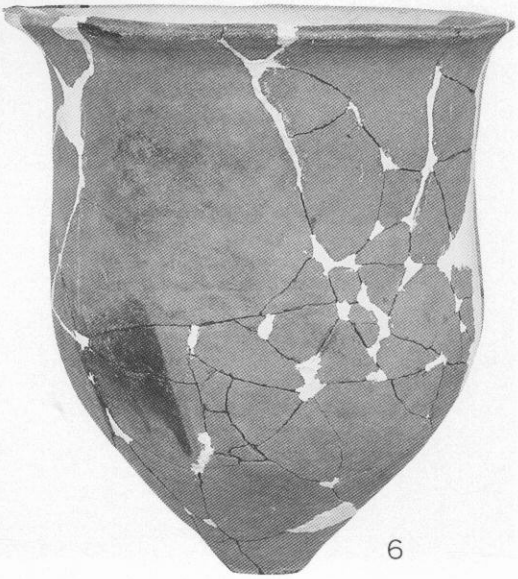
1　通り浦遺跡竪穴式住居跡

2　通り浦遺跡掘立建物







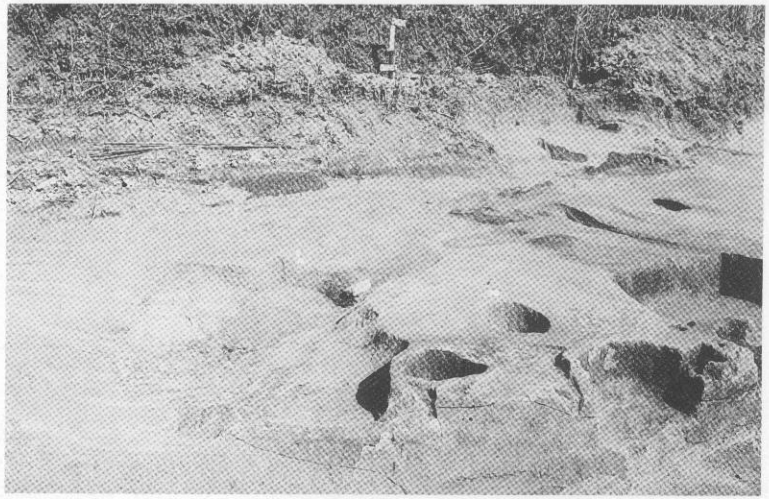


１～５　住居跡出土遺物　６　Ｋ１

1　剣塚遺跡調査区遠景

2　剣塚遺跡調査区近景

3　剣塚２号窯跡（前庭部より）

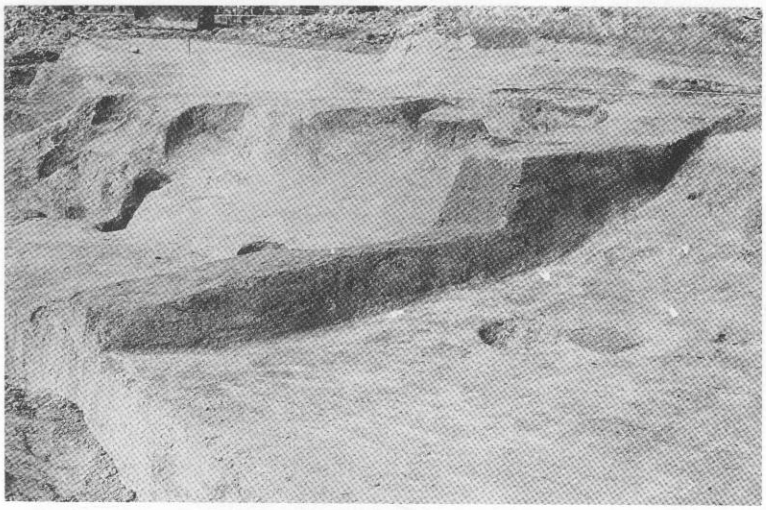


4　剣塚２号窯跡（焚き口・燃焼部周辺）

図版３

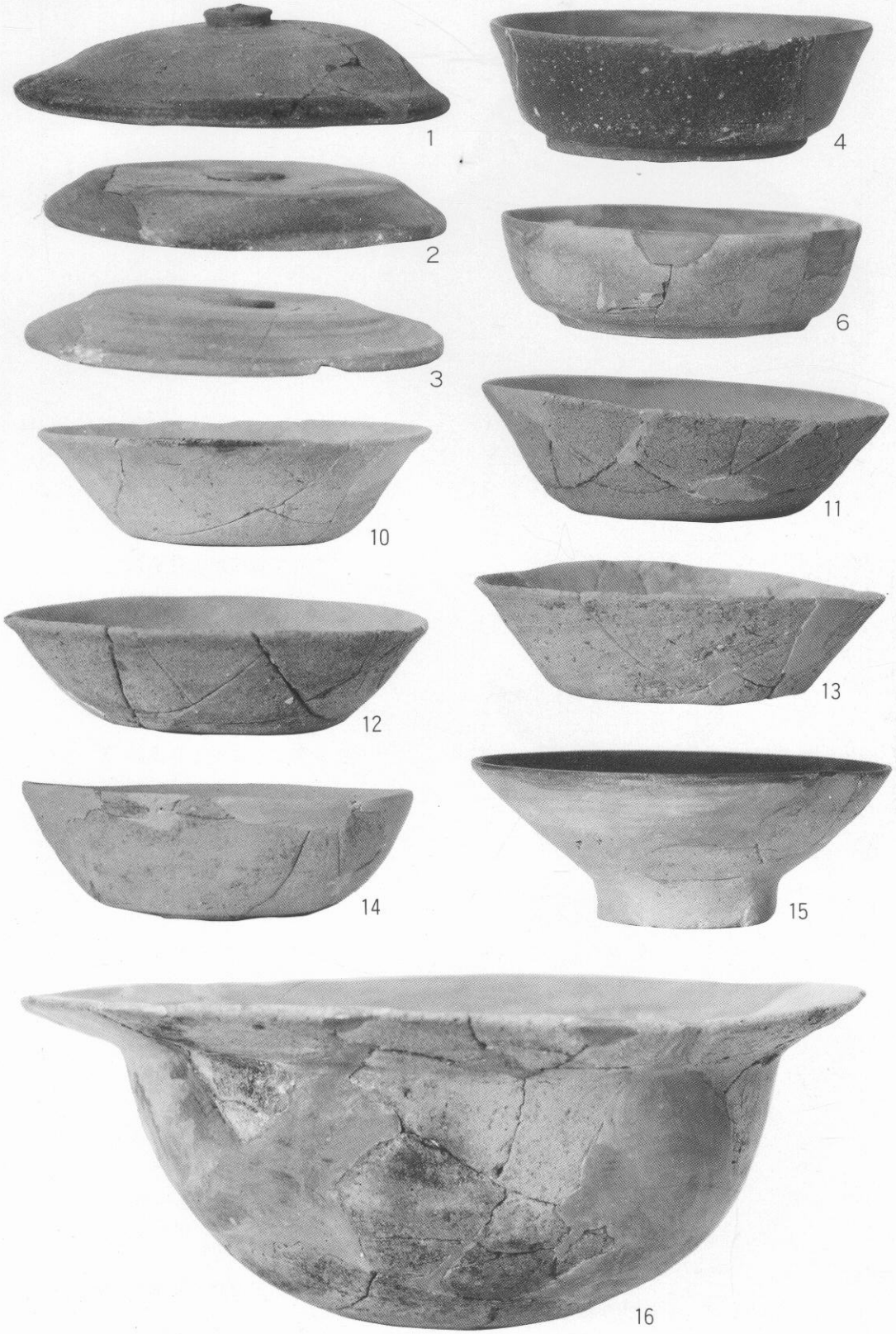
図版４

1　剣塚２号窯跡（煙道側より）



2　剣塚２号窯跡（側庭部）

3　剣塚２号窯跡（前庭部断面）



剣塚遺跡出土遺物（写真番号は挿図番号に同じ）

1.大字二日市出土骨蔵器

2.大字二日市出土骨蔵器 蓋

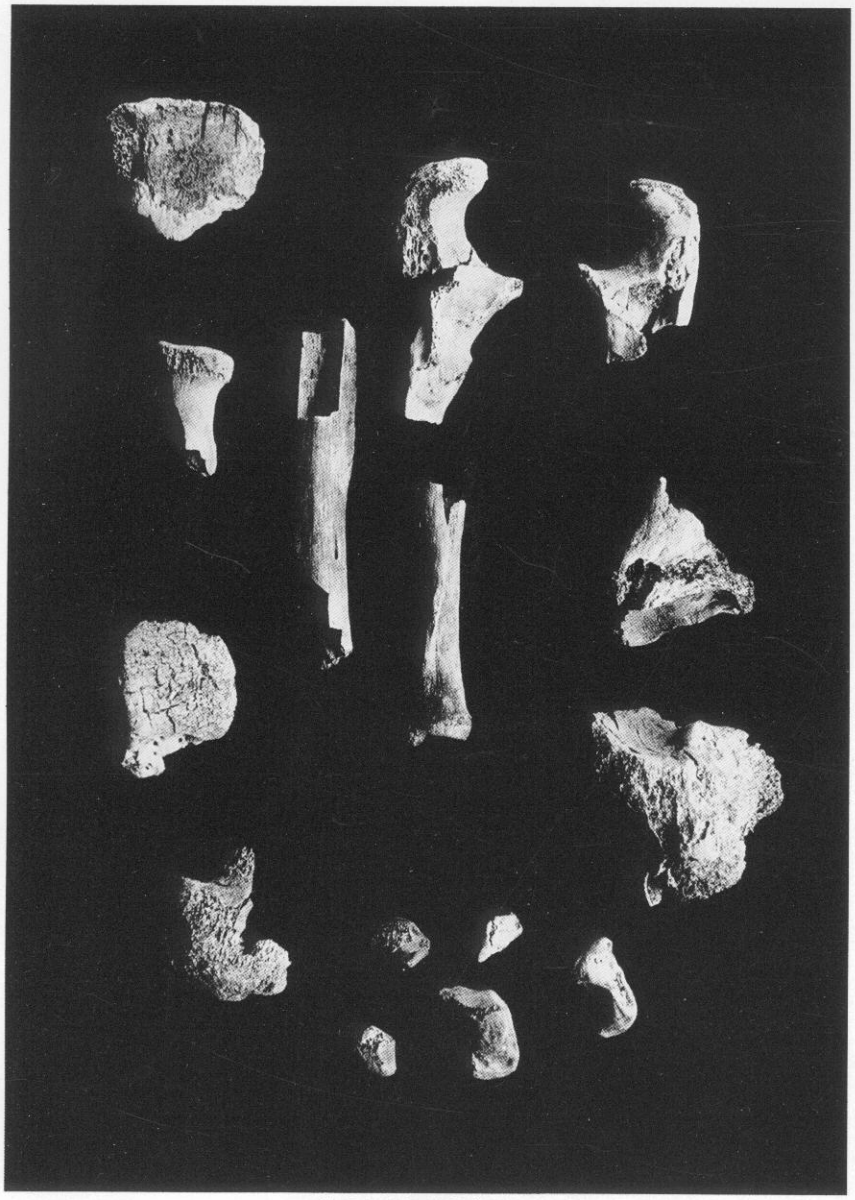
3.大字二日市出土骨蔵器 身

大字紫出土蔵骨器

内容器

中容器

外容器



峰出土火葬骨（一部）

通り浦遺跡・剣塚遺跡
付　筑紫野市大字二日市・大字紫
出土の骨蔵器
筑紫野市文化財調査報告書 第10集
昭和59年９月１日

発　行　筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753番地の1
印　刷　瞬報社写真印刷株式会社
福岡県福岡市中央区天神５丁目４－16